情報収集勝利への道

第二回

講談師　一龍斎貞花

本誌に情報収集の大切さが書かれていたところから、戦国時代の情報収集について書いている。正しい情報を逸早くつかむことが勝利に結びつく。

株価の値動きをつかみそこない大損も少なくない。戦国時代は情報網少なく、間者、忍者を使って敵の情報収集にやっきとなった。

豊臣秀吉と徳川家康が、ただ一度戦った小牧長久手の戦い。

柴田勝家を滅した秀吉の下に織田信長の旧臣が相次いで幕下に。

秀吉が天下を治めんとする態度に信長の次男信雄は家康に救いを求め、織田と同盟を結んでいた家康は信雄に協力。

美濃大垣城主池田恒興は、「この戦いに勝てば駿河と遠江を進ぜる」という秀吉の誘いにのり、まず手柄を立てようと犬山城を襲撃、不意をくらった犬山城は落城。

家康は、犬山落城の報を逸早く知るや大いに驚き直ちに小牧山城へ。信長が岐阜へ移ってから廃城となっていたが、小牧山は尾張平野を一望できる城。信長の造った石垣はわずか3m。

そこで酒井忠次はじめ重臣たち先頭に立って鍬をふるい、わずか5日間で堀をうがち、掘った土で高さ8mの土塁で城を二重に囲み、4kmに及ぶ要塞を築いた。

秀吉の西軍10万、家康、信雄の東軍1万5千と劣勢だが、西軍の動きが一望に眺められ対処出来る。

池田恒興は、家康の本拠岡崎城を攻めようと出陣。池田軍1万6千の軍勢の動きを見るや、敵にさとられぬよう空堀を掘り下げた裏の通路から4千5百の兵がこっそり出陣。酒井忠次の領土とあって土地勘があり不便な森の中を進み夜明けと共に攻撃を開始。思いもよらぬ敵の出現に敗走した西軍、敵の動きがつかめなかったからである。この戦いで恒興と、娘婿の豪勇森長可も討たれ、怒った秀吉大軍を率いて家康を追うも、家康さっさと小牧山へ帰城。東軍勝利に本多平八郎攻撃を進言するもまともに戦ったら秀吉に勝てないと持久戦。早く戦を切り上げたい秀吉は、信雄を懐柔して講和を結び、信雄を助けるという大義名分がなくなった家康は翌年秀吉と和睦。ここに力の大きさを知らしめた家康。敵の動きを眺められる小牧山の重要性を察した勝利。

家康の天下取りは関ヶ原にあらず、大坂の戦いにあらず小牧山にありといわれるゆえん。この戦いに酒井忠次、本多平八郎、榊原康政、井伊直政が大働きしたところからこの4人が四天王と呼ばれるようになったという説もある。

重臣石川数正が、秀吉の傘下に走るや家康はただちに徳川戦法を武田戦法に切り替えた。プロ野球でコーチが他球団に移ると、作戦、サインを変えるのも同じです。

敵の間者を利用した毛利元就

主君大内義隆に謀反して殺害し、勢力を伸ばす陶晴賢を討つべく毛利元就は策略を巡らせていた。

晴賢の重臣智勇兼備の名称江原房栄を、毛利に加担しようとしていると間者にデマをふりまかせ殺させる。

厳島の西北宮尾に城を築いたのは元就が全智全能を傾けた大謀略。

陶軍の2万に対し毛利軍わずか4千。

まともに戦って勝てる見込みはない。互角に戦うには敵を狭い場所に誘い出し奇襲攻撃をかければ、大軍とて数の力で押し切れるものでないと考えた。

或る晩、城中で酒宴を催した。その席に招ばれた琵琶法師が琵琶を演奏。

その琵琶法師が敵の間者と見破った元就は酔ったふりをして、

「皆の反対を押し切って宮尾に城を築いたのは一代の不覚、敵に攻められたらひとたまりもない。今更捨てるわけにもいかず、ハテどうしたものか」

と嘆いてみせた。

ただちに晴賢の元に伝えられ、晴賢大喜びで毛利を叩く絶好の機会と、大軍を率いて出陣。元就の情報合戦の勝利です。

元就は、折柄の暴風雨の中船を出させ、船頭が心配するも、

「厳島明神が守って下さる、大丈夫じゃ」

と、船を出させ風雨をついて厳島の東海岸へ上陸するや、船を一艘残らず帰させ、

「陶軍に勝たなければ帰ることが出来んぞ」

と、家来に背水の陣をしめします。

一方、元就の三男小早川隆景率いる別動隊は、豪胆にも厳島神社正面の陶軍の大船団が停泊している処へ。

「九州から助勢に参った大友水軍でござる」

嵐激しく毛利軍とは分らず、大軍の気のゆるみもあったのでしょう。喜んだ陶軍信用し、

「援軍が来てくれれば勝利間違いなし、どうぞどうぞ」

と、場所を空けてくれた。

そんなことがあるわけがないと思われることでしょうが、当時はレーダーとてなく、おまけに暗い嵐雨の中視界も悪い。それにまさか敵が本陣の真っ只中へ乗り込むなぞ誰が予想するものですか。

どうしても解決策が見つからない時には思い切って正面からぶつかれば道が開けることがありましょう。

敵の虚をついた小早川軍。

かくして陶軍ははさみ討ちに会い、船で逃げんとしたが、隆景の命令で敵船に火を放ち全滅。

毛利軍の大勝利は、村上水軍の援軍、そして平賀政康という小豪族が陶を裏切ったのも勝利の一因ですが、

往年の日本海軍が参考にしたといわれる厳島合戦に勝利を得た元就この時59歳。信長が生れた時元就すでに38歳。この戦いによって日本全国に元就の名が轟くようになったと申しますから遅咲きの武将。

かくして石見銀山を手に入れ大量の銀を正親町（おおぎまち）天皇即位の費用に献上して任官。

秀吉は、サラリーマンからの出世。元就は、零細企業の社長の次男。兄が亡くなり後継者となり、550回の戦いに65回も陣頭に立った勇猛な武将。倅にあとを譲ったが、「会長頼みます」と言われ、その倅も早死し生涯采配を振り続け、70歳の時尼子を降伏させ中国を手中に収めた。後に残った二人の倅吉川元春に小早川隆景は、元就の教えを守り甥の輝元を支え誠実な親子関係があったのも、元就の人の心を知り尽くし三本の矢でも知られる慈愛に満ちた教訓あったればこそ。

用意周到な謀略工作も情報収集あったればこそ。謀略だけでは絶対人がついてくるはずがなく、和歌を詠み学問をよくした教養人であったのです。

正しい情報収集によって勝利を得た武将は少なくない。誤った情報によって敗れた武将も少なくない。

そこには家来を信じ大事にすればこそ、家来もそれに応えて一心に勤めてくれる。

今川義元の行動の情報を得て、桶狭間で大敵義元を討った信長。浅井長政の裏切りを知って危機一髪危いところを逃れた信長、裏切り情報収集が遅れていたら命はなかったに違いない。

信長の死を逸早く知って中国から大返しの秀吉、その行動をつかめなかった明智光秀。

情報はただつかめばいいというものではない。相手を読みいかに活用するかが大切でありましょう。

情報過多の今日、まどわされず正しい情報をつかんで下さい。

大河ドラマの大河館が観光誘致に建てられ、ドラマが終るや一年で廃棄される。

岡崎城の中に「どうする家康」の大河ドラマ館。城内とあって家康の産湯の井戸、竹千代像、三方ヶ原に敗れた時のしかみ像、三河武士の屋形、二の丸跡、本多平八郎像とただドラマ館だけでなく、流石家康若き日の本拠岡崎城ならでは一大歴史ドラマの地です。